

“子供の心と身体の健康を考える会” の活動報告とそこから得た所感

大山 建司

OHYAMA Kenji

1998年、28年間学んだ小児科学講座を離れて看護学科に籍を移しました。看護学教育を始めるにあたって、自分の勉強になり、かつ看護教育・看護活動にも役立つものはないかと考え、これまで学んできた小児内分泌学と関連を持ちながら発展させられる分野として小児保健活動を新たな視点で始めてみようと考えました。約半年の準備期間を持って1999年に“子供の心と身体の健康を考える会”を発足しました。この会の最大の目的は、子供を取り巻く様々な職種の人が一同に介して、それぞれの立場から子供の健全な育成をはかるための意見を出し合って、より良い環境を作っていくことです。

世話人を、横山宏(小児科医)、田中均(吉田保健所長、現県立中央病院部長)、隈部桂子(隈部小児科医院)、甲斐陽子(八田中学校養護教官)、山縣然太郎(山梨大医学部保健学2)、渡辺タミ子(山梨大医学部臨床看護)の6氏にお願いし、事業として、年1回の子供の健康支援フォーラムの開催(7月第4土曜日)と小人数での講演会、相談会を適宜開催することにしました。フォーラムの記録集を作成し、会に参加した人に配布しました。

子供の健康支援フォーラムは2年毎にテーマを決めて、講演とそれに関する討論を行ないました。第1回、第2回のテーマは“10代の問題行動を考える”としました。第1回子どもの健康支援フォーラム開催の趣旨は以下のような内容です。

『20世紀は、物質文明が急速に進歩した時代です。そしてその進歩は、一方で人間が人間らしく、自然に生活していくことを難しくさせてきたように思います。子どもが心身共に健やかに育つということは、本来当り前のことです。社会の中で、家庭の中で、両親兄弟が普通に生活をしていれば、その中で子どもは健全に成長していきます。今、子どもの心と身体の健全な発育に関する問題が様々な分野で取り上げられ、注目されてきたことは、人間が作り出した物質文明、社会環境に人間が適応出来

なくなってきた証ではないかと考えています。

親子関係を考えてみても、子育ての基本は人類の歴史のなかでそれほど大きく変化していなかったはずですが、20世紀の社会の変化が育てる親の側に変化をもたらしたのか、育てられる子どもの方に今までは違う変化が生じているのか、育て方自体をこれからは変えていかなければならないのか、様々な視点から考えていく必要があると思います。そして、急には変えられない現在の社会環境のなかで、子どもの心と身体の健全な成長を促すために、具体的に何をしなければならないのか、一人ひとりが身近な問題として考えていく必要があります。

子育てが問題になる社会は、親子関係、学校生活、社会環境を含めて健全な社会とは言えない、と言うのが現在の私の認識です。健全な精神は健全な肉体に宿り、健全な肉体は健全な精神から生まれる、と言う教えは、心と身体のバランスのとれた成長を意味しています。最近の子どもの問題は精神面のみが目目され、いわゆる心の教育の重要性のみが強調されています。しかし実際には身体発育の問題が内在していることも少なくなく、また精神的な問題が身体発育に異常を生じることも珍しくありません。このフォーラムは子供の心と身体の健全な育成を達成するために、多くの人々が集まって考え、討論することにより、問題への認識を深め、解決の糸口を探ることを目的として発足いたしました。これからの子供の将来を明るいものにするため、叡智をしばる機会になれば良いと考えています。』

第1回子どもの健康支援フォーラムのプログラムは以下のような内容で、毎回必ず身体面、精神面の両面からテーマに取り組み、十分な討論時間をとることを原則としました。

主題：10代の問題行動を考える

1. 思春期の身体の成熟

司会 横山 宏(山梨小児保健協会会長)

演者 大山 建司(山梨医科大学臨床看護学)

2. 思春期の心と身体の発達

“バランスのとれた心と身体の発達が健康な思春期をつくります”

山梨大学医学部看護学科臨床看護学講座：Clinical Nursing, University of Yamanashi

“子供の心と身体の健康を考える会”代表世話人

司会 大山 建司(山梨医科大学臨床看護学)

演者 松橋 有子(広島大学教育学部)

第1回子どもの健康支援フォーラムの出席者は150名と予想を越え、養護教官、保健師、学生、主婦、教師、医師と多彩で、開催の目的を達成したと思えました。

2000年度には、隈部桂子先生に“診療の場で見えてくる子供の姿”と題して講演していただき、中巨摩郡の養護教官を交えてミニフォーラムを開催しました。第2回子どもの健康支援フォーラムは“10代の問題行動を考える”を再度主題として開催しました。開催にあたって以下のような所感を述べました。

『昨年、第1回子どもの健康支援フォーラムを開催したところ、多くの方々にご参加いただき、子どもの健全な育成に対する関心の深さを痛感いたしました。その際のアンケートの中からご要望が多かった問題をテーマとして、今回は少し具体的な内容の講演会にしようと考えました。

最近、17歳の子どもの犯罪が社会的問題となったことから、子どもの教育をめぐる議論がふたたび活発化してきました。おとなの中には“近ごろの子どもはおかしい”と感じている人が多いと思いますが、子どもから見れば“おとなのほうがもっとおかしい”ということになるかもしれません。子どもの教育で常に問題になるのは親の教育です。しかしその親の教育は誰がしたのかといえ、60～70代の祖父母にあたる人達です。

教育の問題という以前に、戦後の社会状況の変化が年代を問わず全ての人達を変えたと捉える方が妥当ではないでしょうか。戦後の復興期、高度経済成長、エコノミックアニマル、バブルとその崩壊など、これらに携わってきた大人達の価値観の変化、自由から利己主義へ、謙虚さから傲慢へ、根気強さから安易な打算へなど、価値観の多様性と称する薄っぺらな主義主張が氾濫しているように思います。戦後の子ども達はこのような変化の様々な断面を見て育っており、知らず知らずその流れの中に飲み込まれてしまった結果が、今の子ども達に反映されていると考えます。大人たちの倫理感の低下、エコノミックアニマルに代表される品性の低下こそが現代の最大の問題と認識すべきではないでしょうか。声高に道徳教育を主張してもその無意味さは子ども達に見透かされているように思います。

“粗にして野だが、卑ではない”という言葉があります。いま、子どもの教育で求められる最も大切なことは、自らの品性を高める道徳教育を自らに行うことではないでしょうか。子どもの健康支援は同時に自分達の心の教育でもあると考えて、このフォーラムに参加して頂ければ、その意義も高まるのではないかと考えております。

このフォーラムは単なる講演会ではなく、参加された様々な分野の方々がお互いの意見を出しあって、より良

い方向性を探る機会としようと考えています。そのため時間も十分とるつもりですので積極的な参加をお願いします。』

第2回子どもの健康支援フォーラムのプログラムは：
主題：10代の問題行動を考える

1. 保健室を訪れる子どもたち

司会 甲斐 陽子(八田中学校養護教官)

演者 山縣然太郎(山梨医大保健学II)

2. 10代の問題行動を考える

司会 渡辺タミ子(山梨医大臨床看護)

演者 松橋 有子(広島大学教育学部)

松橋先生には中学時代にレイプを受けた少女の事例をどうして、心身の発達とその障害について具体的に講演していただきました。

2001年度、2002年度の主題は“様々な立場から見た子供の姿”としました。2001年度には、小児科医3名で無料健康相談会と昨年に続き隈部先生によるミニフォーラムを開催しました。

第3回子どもの健康支援フォーラムのプログラムは：

1. 早熟な子供の問題点とその対応について

司会 加藤 和子(県立看護大学)

演者 大山 建司(山梨医科大学)

2. 10代の問題行動を考える(その2)

司会 甲斐 陽子(八田中学校)

演者 神庭 靖子(山梨医科大学)

第4回子どもの健康支援フォーラムのプログラムは：

1. パネルディスカッション

司会 菅 弘康(臨床心理士)

「様々な立場から見た子供の姿—その問題と対応—」
パネラー

幼稚園 岩田 紀生(いづみ幼稚園)

中学校 條々 篤美(梁川中学校)

スポーツクラブ 宮澤 正純(宮澤整骨院)

2. 講演 様々な立場から見た子供の姿

— 一家族の中のコミュニケーション

司会 渡辺タミ子(山梨医大臨床看護)

演者 大河原昌夫(住吉病院精神科)

パネルディスカッションと講演の組み合わせは好評で、質議も活発に行なわれましたので、この形式を続けようと考えています。

本年は区切りとなる第5回子どもの健康支援フォーラムを新しい主題で趣向を変えて開催する予定です。最後に今後のテーマに加えようと考えている所感を述べて活動報告とします。

少年犯罪の若年齢化による少年犯罪法の改正、教育基本法の改正論議など、子育てに関する議論が盛んに行われています。しかし変わってきたのは子どもだけではなく。戦前の教育を受けた老人の価値観は戦後変化しな

かったのでしょうか。我々終戦直後に生まれた者でも、昔を振り返れば大きく変わってきています。小学校低学年まではテレビのない時代でした。しかし今ではテレビのない生活は考えられないという人が多いと思います。テレビの普及により家族の会話が減り、さらに一家に何台もテレビを置くようになれば一家だんらんはなくなります。コンピューターによる情報革命が進めば、人はコンピューターとだけ会話するようになるかもしれません。IT革命を声高に言う人達は、その先にどのような人格を想定しているのでしょうか。育つ環境が全く異なる世代に昔の教育、しつけの良さを強調することは、ほとんど無意味です。技術革命は加速度的に進んでいます。戦後50年の変化は、おそらく江戸時代300年の変化よりも大きいでしょう。社会情報、文化の変化が緩やかなときは、親子の違いもわずかで、親子は同じような価値観で生活しています。現在は、江戸時代初期の親から明治時代の子どもが生まれたような変化が親子間に起きていますし、一人の人間の一生の中でも大きな変化が起きていると思います。

技術の変化に人間が追いついていけなくなっているのが現在の状況で、人が様々な形で適応しようとしていることが社会問題として現れてきています。変化に適応しているように見える人は無意識のうちに人格が変化し、適応できない人は問題を起こします。いずれの場合も精神的には大きな葛藤が生じ、このような現象は発達過程にある子供に最も大きな影響を与えます。人間性、価値観の加速度的な変化に対応するためには、技術革命を停止させ、変化のテンポを遅くすることが考えられますが、これは現在の社会経済状況では不可能です。それでは、変化していく人間性(人格)がさらなる発展を遂げるためには、どのような人間性を目指せばよいのか、新しい人間性を模索し、創造していくことが重要と考えます。懐古的な発想で議論することはあまり意味がないのではないのでしょうか。今の子どもがテレビに曝され、ポケベルを駆使しているように、幼児期からコンピューターを駆使して育っていくこれからの子どもがどのようにして人間関係を維持していくのか(直接的な人間関係はどんどん減少して行くかもしれませんが)、社会そのものの価値も大きく変わっていく可能性があり、100年後には今とは全く違う人類が生存しているという事態も想像されます。

これからの子育てでは、すべての人間に共通し、過去から未来にわたって変わることなく人間として最低限必要なこと、そのことを乳幼時期にきちんと教えることが大切ではないのでしょうか。“他人を傷つけない”このことだけが共通の価値観になるのではないかと考えています。協調性、思いやり、親孝行、感謝、尊敬の念などという価値観は、なくなることはなくても今とは異なる概念になっていくかもしれません。このようなことにあまり価

値を認めない社会とはどのような社会なのか、それを良しとする人間はどのような価値観を持つのか、そうならないようにする有効な手立てはあるのか、未来の人間社会を考えることは極めて困難です。IT革命の先に何があるのか、IT革命とは人格革命かもしれないということをよく考える必要があります。